

平成30年10月30日

行政視察活動記録

教育民生常任委員会
委員長 大山 博道

年月日	平成30年10月23日（火）から24日（水）まで
場 所 及び目的	熊本県山鹿市 山鹿市民医療センターの経営状況について （市民病院の将来像と地域包括ケアシステムの構築について） 熊本県山鹿市 山鹿市出土文化財管理センターの管理運営について （教育施設の整備方針について）

年月日	平成30年10月23日（火）
相手方 及び目的	山鹿市民医療センター 山鹿市民医療センターの経営状況について （市民病院の将来像と地域包括ケアシステムの構築について）
内容・ 結果等	<p>山鹿市は熊本県の北部の内陸部、熊本市から北側へ約30km、福岡市から南南東へ約90kmの場所に位置し、市中央部よりやや南寄りにある中心市街地から南部にかけては盆地となっており、豊かな自然環境のもと、良質な温泉、歴史・文化遺産があり、稲作が盛んな土地柄である。</p> <p>山鹿市民医療センターは、地域における基幹的な公立医療機関として地域の医療機関と連携を図っている。</p> <p>病院の規模としては、一般病床197床、感染症病床4床、医師数26名、看護師数159名、総数244名体制で医療を提供している。</p> <p>市民病院の将来像と地域包括ケアシステムの構築の視点から人口規模が5万人であるという類似性、また、熊本地震を受けた経験もあることからの選定となった。</p> <p>医療センターが抱える課題としては、医師、看護師が慢性的に不足状態であることであり、これについては、市民病院と共通の課題を抱えており、医療センターが実施している医師確保対策としては、病院長が定期的に熊本大学病院を訪問し、大学側に病院の現状を理解してもらう等の活動を通し医師の確保に取り組んでいた。また、それとは、別に民間の医師紹介会社も利用し、これまで常勤1名、非常勤1名の医師を確保した実績を有しているとのことであった。</p>

内容・
結果等

また、人材育成の観点から院内教育、研修体制の拡充を図るとともに、熊本大学病院の協力型臨床研修病院の一つとして、初期研修医の受入を実施していた。

医療センターは、地域の中核病院として急性期を中心とした医療を提供しており、地域の医療機関との連携・役割分担を重要視し、地域全体で患者をケアする地域完結型医療を目指しているとのことであった。

さらに、地域ニーズからがん患者に対する緩和ケアを急性期医療と並行しながら実施する将来方針をもっていた。

地域の医療機関との紹介・逆紹介については、医療センターと地元の医療機関との間で年2回協議会を定期開催しており、お互いが顔を合わせることで円滑な紹介・逆紹介ができる関係を構築し、結果として、高い紹介率・逆紹介率を保ちながら医療センターだけでなく地域で完結する医療を実施できていることが確認できた。

救急医療体制については、平日日勤帯においては、医師1名、看護師2名体制で対応しており、3名（救急専門医、呼吸器内科専門医、循環器内科専門医）の医師が曜日ごとに担当し、それ以外を他の診療科医師が担当している。

救急車はすべて受け入れることを原則とし、救急当番の自覚を持たせるため、当番医師に救急専用PHSを持たせて救急にあたらせる等、病院として救急医療に真摯に取り組んでいる姿を確認することができた。

医療センターにおける年間の救急車搬送患者受入数は、約1,000件となっており、市民病院の受入数と同程度と変わらないが、応需率としては違いが見られた。これは、医療センター周辺の医療機関が救急要請を受けることにより、医療センターへの救急からの要請件数が少なくなり、応需率として差が生じているのではないかと考えられる。

今回の行政視察では、地域医療連携を軸に病・病連携、病・診連携、そして在宅へという医療連携体制の構築に努め、地域ケアシステムの構築では、大学病院、民間病院等各医療機関との連携を中心として医療、介護、福祉体制の協力により各分野の役割分担の確立を市民病院が中心となって、実現するための活動が必要と認識した。

今後、本市議会においてもさらに調査研究を進め、市民病院の将来像について検討する必要があることを強く感じた視察となった。

内容・
結果等



備 考

(参加者) 教育民生常任委員会委員 5名、市民病院 1名
教育委員会事務局 1名 議会事務局 1名 計 8名

年 月 日	平成30年10月24日（水）
相手方 及び目的	山鹿市出土文化財管理センター 山鹿市出土文化財管理センターの管理運営について （教育施設の整備方針について）
内容・ 結果等	<p>今回の視察は、旧鶴羽小学校を利用し、古墳遺跡等の保存、活用を考え、市にとって文化財等の貴重な遺物の管理、展示を今後の市の基本方針とし、それに必要な対策を考えるための視察であった。</p> <p>山鹿市出土文化財管理センターは、山鹿市内の史跡の管理や出土品の収集、保存、展示及び埋蔵文化財調査活動の拠点施設として、平成8年に建設された。また、当センターは、国史跡「方保田東原（かとうだひがしぼる）遺跡」内に建設されており、当遺跡のガイダンス施設も兼ねている。</p> <p>方保田東原遺跡は、卑弥呼が邪馬台国を治めていた時期にあたる弥生時代後期から古墳時代前期（約1900年～1700年前）の集落遺跡である。さぬき市内にも同時期の遺跡が確認されており、寒川町石田東（現ビック周辺）に所在する「森広遺跡」、さぬき南中学校が所在する「寺田遺跡」、辛立文化センターが所在する「上辛立遺跡」など県道10号線沿いで多く確認されている遺跡が当該期の遺跡である。</p> <p>センターは、述べ床面積、764.03㎡、鉄骨3階建てで、建設に係る事業費は総工事費1億8,977万9,000円（国庫補助6,000万円、県費補助1,080万円、市債1億1,210万円、一般財源687万9,000円）であった。</p> <p>センターの職員体制は建設当初、文化財課が配置されていたことから職員が常駐していたが、機構改革等により生涯学習課文化財係となった事、決裁事務・協議等のタイムラグが生じるようになったこと等から、文化財係職員は本庁勤務となり、現在は非常勤1名・臨時職員2の配置となっている。</p> <p>地域住民で構成された「山鹿市方保田東原遺跡応援団」の協力を得て、地元の子どもたち向けの歴史学習の一環で、遺跡の一区画にヒマワリの種をまく「ヒマワリ畑でクイズラリー」を毎夏に開催。「ランタンフェスティバル」や「古代体験ひろば」等の事業を展開していた。</p> <p>企画展示等は、山鹿市立博物館で行っているため、博物館活動は行っていないが、平日の来館者（年間200人程度）には、職員が館内の説明を行っている。</p> <p>埋蔵文化財以外の民具、古文書等の資料は市内の別施設で保管しているが、今後一括で保管・展示できる施設を建設する計画を作成していた。</p> <p>また、山鹿市にある熊本県立装飾古墳館では、三世紀後半から七</p>

世紀初頭の古墳時代を象徴する遺跡群が熊本県に集中し、山鹿市にも装飾古墳と称される多数の遺跡が存在する事からよく整備されていた。

さぬき市でも津田湾から陸路大川、寒川地区に点在する古墳群がこの時期にあたる。富田茶臼山古墳は、大和朝廷に影響を受けた存在であり、岩崎山古墳から出土した銅鏡等は墳墓とともに権威の象徴を表し重要な資料として、保管、管理する必要性を視察により感じた。共通する時代のロマンを大切にするために、より具体的な資料館の整備さらには教育施設の整備方針についての検討が必要であることを強く感じた視察となった。

内容・
結果等



備 考

(参加者) 教育民生常任委員会委員 5名、市民病院 1名
教育委員会事務局 1名 議会事務局 1名 計 8名